

令和3年度教育事業 ぼうさいトレーニングキャンプ

1. ねらい

- ① 不自由な生活体験を提供し、非常時における生活のシミュレーションをする
- ② へこたれない力（レジリエンス能力）を育てる
- ③ 自主的、自発的な学びの力を育む

2. 実施日

令和4年1月29日(土)～30日(日) 1泊2日

3. 対象者

小学校3～6年生

4. 参加者 / 申込人数

18名 / 20名

5. 講師

大西 琢也 氏

(NPO法人森の遊学舎代表理事、防災士)

6. プログラム (要約)

自然の家に滞在中に大地震が起こり、もう一泊を自然の家のプレイホールで過ごさなければならなくなったというストーリーで、プログラムを開始。

プレイホールにテントを設営し、各個人の寝床を作り、段ボールや倉庫にある備品をうまく活用し、防寒対策も施した。時間の過ごし方も含めて、自分たちで考え、自分たちで話し合い、仲間どうしでうまくコミュニケーションをとらなくてはならないようなプログラムを進めた。

スケジュール

29日(土)	はじまりの会 オリエンテーション(ねらいの説明) テント設営(寝床づくり) 防災野外炊事(夕食) たき火・あそびの時間 就寝
30日(日)	起床 防災野外炊事(朝食) 片付け 防災ワークショップ 終わりの会

1月29日(土)【1日目】

今回は「遊びではない」と案内されているので、少し緊張感のある雰囲気です。「はじまりの会」がスタートした。「今回は大変なキャンプになると思いますが」という所長あいさつに笑顔で反応する参加者たち。オリエンテーションでは南海トラフ地震のシミュレーション映像を真剣に見ている者もいた。

オリエンテーションで、今回のねらいが伝えられ、そ

の後、講師の大西氏が行った趣旨説明も兼ねたアイスブレイクを体験したあとは、張り詰めていた気持ちもほぐれ、学びつつ楽しもうという雰囲気になっていった。

昼食後さっそく、自分たちがひと晩過ごす寝床づくりを行う。寒さをどうしのぐかがテーマ。倉庫の中にある物も自由に使ってよいと言われたあたりから、子どもたちの独創的な活動が始まった。

段ボールやスポーツ用具を活用してできた寝床はとても立派で、避難生活を少しでも工夫しようという遊び心が見て取れた。途中で講師が声をかけ、全員でテントを見回った。工夫すべきポイントなどを講師がアドバイスした。その後はあまり交流がない参加者という想定だったので、見知らぬ者同士が良好なコミュニケーションをとれるよう名前を覚えるゲームを行った。



夕食は一人で火をおこし、空き缶を使ってご飯を炊く実習を実施。それぞれが苦労しながら、ご飯を炊き上げた。達成感があったようで、「おいしい」と喜んでご飯を味わっていた姿が印象的だった。

講師から、「火を起こしたのは良いが、そのあとの火の管理が良くない」と参加者に注意。確かに火は燃やしっぱなしのまま、後片付けもせずにご飯を食べている者もいた。強風の中、燃え広がったりする可能性もあり、火の怖さもはっきり伝える必要があった。講師もあえて厳しく、伝えていた。

きりもみ式での火おこしのデモンストレーションを



講師が行い、火のありがたさ、怖さ、そして神秘さを伝える機会となった。その後は、たき火で暖を取ったり、

プレイホールの中のテント周辺で過ごしたり、暗闇を怖がることなく就寝までの時間を過ごした。



1月30日(日)【2日目】

みんながそんなに寒がることもなく無事に朝を迎える。不安だったという声はあまり聞かれなかった。朝食は火をおこして、ホットドッグを焼く。前日の経験を活かしながら、楽しそうにたき木を森の中から集めてくる参加者。夜もそうだったが、朝も配給された食材を自分たちで調理する。「自分でやる」という意識が身についてきたようだ。

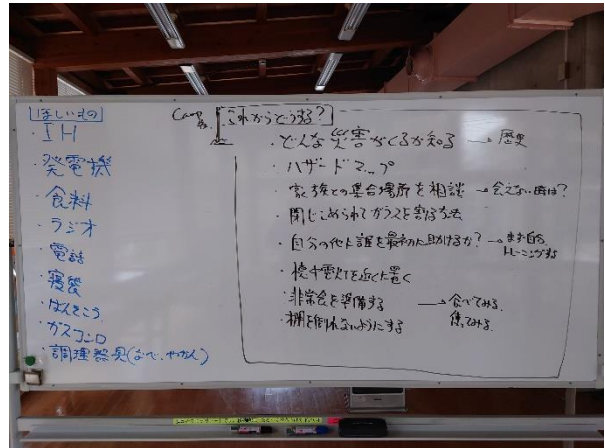


朝食を終えて、避難生活シミュレーションは終了。片づけをして、ふりかえりの時間とした。ここから保護者も参加し、ひと晩過ごしたテントの様子を一緒に見て振り返った。



参加者一人一人が、感想を述べた。「落ち着いて、冷静に考えて過ごさないといけないと思った。」「これから家でも自分がお米と水を炊飯器に入れようと思った」「災害って大変だなんて思った。炊飯器が使えなくなったら昨日のように自分でご飯を炊いてみたいと思った。」という声が聞かれた。グループでの話し合いは、本当に地震が来たらどうする?というテーマで行った。大変だった、楽しかったという声のほかにも、「防災バッグをつくる」というコメントもあった。

最後に講師から、「自分が助かるのはまず最優先で、その次に誰を助けるかを考えてほしい」という話が印象的であった。



7. まとめ

災害は不意にやってくるものである。ふだんから自分自身で考え、判断できる力を身につけておけば、災害が来ても慌てず対応できるはずである。「いつかこんなことが起こるかもしれない」と備えておけば、それに対応した行動がとれるようになって考えている。

保護者アンケートに「どれだけふだん便利な生活をしているか、あたりまえがあたりまえでないことに気づいたようです」という記載があった。

今回の経験はきっかけづくりにすぎない、この体験をきっかけに、家族が「防災」の意識を共有し、不意の時に備えられるようになったら、そして、このきっかけをもとに、子どもたちの体験の重要性の理解が深まればと思う。広域防災補完拠点として、人材育成の立場から今後どのような取組を進めていくべきか、また研修支援プログラムへの活用など、施設としての取組をより進めていきたい。

(企画指導専門職 高瀬 宏樹)